

熱川温泉病院

根本 裕子(看護部 / 看護師)・福本 幸子(看護部 / 看護師)

功 績 海外在住のご家族に対し、患者さんとの面会をICTを利用することで継続的に実施するなどご家族に献身的に寄り添い、ご家族から心からの感謝の言葉を頂戴するなど健育会の看護理念である「安心感の提供と親身な対応」を実践した功績。

患者概要：年齢 70歳代

既往症 パーキンソン病、誤嚥性肺炎

当初車椅子、発作後は亡くなられるまで寝たきり状態

推薦者氏名 小林 利恵(師長)

推薦理由 入職5年目の福本と入職20年目の根本は、国境を越えた距離的制約の中にあっても、ICTを活用しながら継続的に家族に寄り添い、不安を安心へと繋げました。健育会の看護理念である「安心感の提供と親身な対応」を体現し、患者さん・ご家族双方の尊厳を守った看取りを実践した彼女らを理事長賞へ推薦申し上げます。

内 容

昨年8月に誤嚥性肺炎により、当院へ転院となった氏は、入院当初からADL全介助でしたが、当院の医師・看護師・リハビリスタッフ・栄養士等による多職種連携で介入した結果、誤嚥なく見守り下での食事自己摂取が可能となり、起き上がりは軽介助から見守りレベルへ改善、立位保持も軽介助で約1分可能となるなど、機能面の向上がみられました。

しかし、9月末に痙攣発作を発症。その後経口摂取は再開できたものの、再度痙攣発作を認め、誤嚥性肺炎を再発し、全身状態は不安定となりました。ご家族(娘さん)は海外在住であり、急変の場合でも直ぐに会うことができないという不安を抱えながらの療養経過となりました。

そこで、看護師の福本と根本は、帰国までの期間、当院で利用されているLINEビデオ通話を活用し、定期的にオンラインで氏の表情や日々の様子を具体的に伝え続けました。画面越しであっても「今、そばに感じるように感じてもらえる関わり」を意識し、ご家族の抱えている不安や葛藤に寄り添いながら対話をおこないました。また、「病室へ伺い、声をかけると反応してお話していただきます」「好物のチョコレートを美味しく召し上がってらっしゃいました」と8時間の時差を考慮し、LINEのビデオ通話ができない場合には、動画を送信したり、LINEメールでのやり取りを小まめに行いました。

その後、ご家族は帰国時期を適切に判断することができ、12月中旬に帰国。最期の4日間のご家族の付き添いのもと、穏やかな時間を過ごされ、尊厳を大切にされた看取りを実現することができました。後日、ご家族からは「母の最期が熱川温泉病院で本当に良かったです。皆さんに良くしていただき、心から感謝します」との言葉を頂くことができました。

今回の福本と根本の行動は、国境を越えた距離的制約の中にあっても、ICTを活用しながら継続的に家族に寄り添うことで、不安を安心へと変え、患者さん・ご家族双方の尊厳を守った看取りを実現したものでした。健育会の看護理念である「安心感の提供と親身な対応」を実践した彼女らを是非ご評価頂ければと思います。